



処方した漢方薬を飲んでもらうために 大事なこと

漢方薬について、こんな言葉を聞いたことはないだろうか？「漢方薬なんて古臭い」「長く飲んでいないと効かない」「苦くて臭い粉薬」。患者の訴えを改善させようと処方したにもかかわらず、たいして飲まれず、なかには捨てられてしまうこともある。漢方薬にも長短所があるが、理解されないのは残念である。子供のころに「お米一粒一粒を大事にし、残さないように食べましょう」と教えられたが、それと同じように、手間と人とお金がかけられた“農作物のブレンド薬”を大事に飲んでもらいたいと思う。そのためにはいかに対処したらよいか。

まず処方された漢方薬が効果を発揮するまでに四つの重要な過程がある。

- 1) 漢方薬メーカーが、品質の良い生薬を生産管理している
- 2) 医師が、証(病態)にあった薬を処方している
- 3) 薬剤師が、適切な服薬指導をしている
- 4) 患者が、理解してきちんと内服している

これをリレーするのに大事なことは、いかに良好な医薬連携を築き、誤解の少ない薬剤情報を患者に提供できるかにある。漢方薬の情報提供書の効能欄には「更年期障害」「産前産後の神経症」「夜泣き、ひきつけ」などが表記され、これをみた患者から「若いのに更年期障害といわれた」「男なのに、女性の薬を出された」「精神科の薬、子供の薬を出された」などの不満がもれる。そこで工夫が必要となる。

まず提供書の表記に構成生薬とその性質を羅列する方法がある。しかしこれでは患者に伝わりにくい。また医療従事者も生薬の特徴がわかっていないと説明できない難点がある。では、メーカーが提供する製剤手帳の「使用目標(証)」を表記するのはどうだろう。例えば「葛根湯：比較的体力のある人で、炎症性、疼痛性疾患の初期、あるいは慢性疾患の増悪期に用いる……」というものである。これは普遍的根拠として活用できるのではなかろうか。もちろん個々の患者に合わせた説明を口頭で行えるとなお良い。一考の余地があろう。

結局、提供書に自動的に印字された効能を漫然と利用せず、内容について日ごろから医師—薬剤師間でよく相談をしておくことである。また薬剤師も、医師の処方の意図とパターンについて理解しておくことが大事なのである。

(若葉ファミリー 常盤平駅前内科クリニック

はらだともひろ
原田智浩)